

『資本論』 第一巻資本の生産過程 第一篇商品と貨幣 第二章交換過程

奢侈（しゃし）度をすぎてぜいたくなこと
眩惑（げんわく）目がくらみ、惑（まど）う

- ・商品は、市場で交換される。
- ・商品所有者が、商品を持って、商品の番人に相対し、同意をもって、両者に共通な意志行為によって、自身の商品を譲渡して他人の商品を取得する。
- ・彼の商品は、彼にとっては何ら直接の使用価値ではない。
- ・そうでなければ、彼はこれを市場にもっては行かない。
- ・商品は他人にたいする使用価値をもっているのである。
- ・使用価値が彼に満足を与える商品にたいして譲渡しようとする。
- ・すべての商品は、その所有者にたいしては非使用価値であり、非所有者にたいしては使用価値である。
- ・商品は、こうして全般的に持ち手を換えなければならない。
- ・持ち手変更がその交換をなし、価値として実現する。
- ・商品は、価値として実現されうる前に、使用価値である。
- ・人間労働の有用であるか、他人の欲望を充足させるかどうかは、諸商品が交換されてはじめて証明しうる。
- ・商品を、欲望を充足させる使用価値をもつ他の商品にたいして譲渡する。
- ・交換は個人的な過程。
- ・他方、商品を価値として、実現しようとする。
- ・商品が他の商品の所有者にとって、使用価値をもっているかどうかは問題でない。
- ・交換は社会的な過程である。
- ・商品を、一般的等価としてなんらかの他の商品にたいして相関係せしめている。
- ・一定の商品を一般的等価となし、社会的に用いられる等価形態となる。
- ・こうして、この商品は——貨幣となる。
- ・交換過程で、種類のちがう労働生産物がお互いに、等しく置かれる。

小ブルジョア社会主義の狡猾さ。商品生産を永久化し、「貨幣と商品の対立」したがってまた貨幣自身をなくそうとする。

『経済学批判』岩波文庫版 103P~を参照

◎『経済学批判』

・労働時間が貨幣の直接の度量単位だという学説は・・・。

・プルドン氏とその学派は、貨幣をおとしめ商品をもとあげて、社会主義の核心であるとして大まじめに説教し、そうすることによって、社会主義を商品と貨幣との必然的な連関についての初歩的な誤解に解消してしまうことを、いつまでもやめなかったのである。

(・・・・・・?)

- ・商品交換は、共同体が他の共同体または他の共同体の成員と接触する点に始まる。
- ・その量的交換比率は、まず初めは全く偶然的なものである。
- ・交換の絶えざる反復は、規則的な社会過程である。
- ・労働生産物の一部は、故意に交換のために生産されなければならない。
- ・商品交換の発達とともに、一般的等価形態は、もっぱら特別な商品種に付着する、すなわち、結晶して貨幣となる。

- ・貨幣形態は、本来一般的等価の社会的機能に適する商品、すなわち、貴金属に移行する。
- ・例えば、金は、むし歯を充填するためとか、奢侈商品の原材料等々に用いられる。
- ・すべての他の商品は、貨幣の特別の等価にすぎない。
- ・価値は、その生産に要した労働時間によって規定される。
- ・そして、商品の一定量で表現される。
- ・これら商品にも同一量の労働時間が凝結している。
- ・土地の内奥から取出されてきたままの金と銀とは、同時にすべての人間労働の直接的な化身である。

文庫ぎんが堂「あらすじとイラストでわかる資本論」より

※貨幣結晶は交換過程の必然的な生産物である。

- ◆「どうして貨幣は金や銀になるのか？」
 - ・商品の持ち主にとって、交換する商品は役立たないものだ。彼にとって必要ならば交換しない。
 - ・つまり、彼にとってその生産物には使用価値はない。
 - ・すべての商品は生産者以外の人に対して使用価値をもつ。
 - ・だから他人が持つ商品が彼にとって使用価値をもつ。
 - ・そして彼のもつ商品は、別の商品と交換できるという価値だけもつ。
- ◆商品の交換は、それぞれの商品の持ち主同士が市場で出会い、自由な交渉により意志を持って行なわれる。
 - ・布の持ち主がたまたま上衣の持ち主と出会い、交換する。
 - ・そして次の小麦の持ち主と交換し、次の鉄の持ち主と交換する。
 - ・しかしこの過程はわずらわしい。
 - ・当然、何にでも交換できる商品、貨幣が生まれる。
 - ・
- ◆貨幣は交換過程をくり返せば、必然的に生まれる。
 - ・商品交換の社会が発展すれば、商品に備わる使用価値と価値の対立が激しくなる。
 - ・そこで、商品の価値を直接表わす貨幣への欲求が生じるのだ。
 - ・そして、ある特定の商品が自然と貨幣となる。
 - ・したがって、生産物が商品になるのと同じ過程で、ある商品が貨幣へと選ばれていく。
- ◆本来、貨幣になるのはどの商品でもよいが、交換過程をくり返していくと、その役割は金と銀が担う。
 - ・貨幣とはあらゆる商品の価値を表す等価形態だ。
 - ・価値とは量で表わされる。
 - ・だから貨幣は量を表わさなければならない。
 - ・金属は分割でき、また溶かして合体できる。
 - ・そして、重さを示す目安になるので、量が示しやすい。
- ◆商品の価値の大小は社会的な平均労働の量で決まる。
 - ・その平均労働は、極めて一般的な人間の「働くこと」そのものだ。
 - ・金属はその成分が比較的均一なので、どこをとっても同じ品質になる。
 - ・だから社会的な平均的労働量を表わすのにふさわしい。
 - ・ここで注意すべきなのは、貨幣もそもそも商品のひとつだということだ。

■金属が商品の価値を表わすのにピッタリな3つの理由

- ◆共同体の接触で商品は生まれる。
 - ・商品の交換の起こる原因は？
 - ・「商品は共同体と共同体が接触するところで発生する」
 - ・共同体とは、一定の価値観を共有している集団。
 - ・ひとつの共同体内では商品は発生しない。
 - ・自給自足生活の原始的な家族だけの共同体があったとする。

- ・その中で生産されたものは、誰の所有物でもない。共同体、つまり家族全員の所有物だ。
- ・そこでは、全員で共有するので、交換は発生しない。
- ・別の家族と接触すれば、そこに交換が生まれる。
- ・このとき交換するものが商品となる。

◆貨幣はどうして金属類なのか？

- ・ボールペンをつくれる人間（あるいは共同体）がほかの商品と交換するために、たくさん生産する。
- ・しかし、自分がほしい商品をもった所有者に出会うことは難しい。
- ・だから、生産物を多くの商品が集まる市場にもっていく。
- ・それでも、交換したいものを所有している相手がボールペンを必要としているとは限らない。
- ・そこで、どんな商品でも交換できる貨幣が登場した。
- ・マルクスは「金や銀が貨幣として使用されるようになったのは必然」として、その理由を「量が著わしう」「分割や合体がしやすい」「大小にかかわらず質が同じ」という3点をあげている。
- ・だからこそ、貨幣は金属類でなければならなかった。

※こうして生まれた「お金」が、やがて資本になる。

「面白いほどよくわかるマルクスの資本論」

土肥誠監修 日本文芸社 より。

◆この章では、商品の代表者として人間が登場する。

- ・歴史的研究では、原始的な交換方法である物々交換から、貨幣を仲立ちとする流通までの発展が、価値形態から貨幣形態への発展と一致することを示している。
- ・商品所有者は、自分がつくり自分が使う以外の余剰生産物を市場に持っていくことで、この余剰生産物が商品となる。
- ・どこで商品が発生するのか。「共同体が他の共同体または他の共同体の成員と接触する点」である。
- ・同じ共同体の中では直接的な交換が行なわれるだけで、商品は発生しないのだ。
- ・貨幣の歴史。量的に分割や合体ができ、質が変わらない条件を満たしたのが金や銀だ。
- ・金や銀は商品が産出される労働の量で価値を表現する。

■ポイント

◎人間社会の市場での商品交換の現実と、歴史的な発展、貨幣形態を考察する。

- ・余剰生産物とは。自分がつくった物のうち、自分が使う以外の生産物。
- ・市場にこの余剰生産物を持っていくことで、商品となる。

◎貨幣が生まれるまで。

- ・原始的な共同体の時代——物々交換
- ・交換が広がると、いろいろな商品の等価物となる商品が出現。
- ・一般的等価形態の役割を果たす。
- ・商品交換の発展につれ、一般的等価形態は特殊な商品＝貨幣となる。
- ・貨幣形態が生まれる。
- ・家畜や貝などを経て、金や銀などの貴金属が貨幣となる。

■「交換過程で、種類のちがう労働生産物がお互いに事実上等しく置かれ、したがってまた、事実上商品に転化される。」

- ◆商品交換の背後に人間がいる。
 - ・マルクスは、商品の背後にいる人間、すなわち商品の所有者に注目する。
 - ・商品を所有している所有者を登場させることで、交換が起こる原因を説明する。
 - ・商品の所有者は、自分でその商品を使う意志がなく、他の商品が欲しいから交換する。
 - ・とはいえ、自分の欲しいものを見つけるのは簡単ではない。それはどの商品の所有者も同じ。
 - ・だからこそ、商品所有者はとりあえず欲望の結実たる一般的等価形態たる貨幣を必要とするのだ。

- ◆こうして、商品所有者は自らの商品を売るために、余剰生産物を市場にもっていく。
 - ・そこに商品が発生する。
 - ・商品は共同体内部にはない。
 - ・共同体内では、交換は直接的である。
 - ・「共同体と共同体とが接触するところ」に商品は発生する。

- ◆歴史的に貨幣はどうやって決まったか？
 - ・商品から除外される商品が貨幣。
 - ・理論的にはどんなものでも構わない。偶然である。
 - ・しかし、実際には二つの事情が決定する。
 - ・①共同体の外にある重要な交換品目であること。
 - ・②遊牧民が運ぶ主要な生産物である家畜などのようなものであること（時には人間奴隷）。
 - ・これは歴史であり、理論とは、ずれている。

- ◆実際、貨幣の座につくのは何でもいいわけではない。
 - ・子安貝（こやすがい）のように、商品交換以前に、ある意味では商品から排除されているものが必要である。
 - ・金や銀に落ち着くようにできている。
 - ・（次の第3章の「貨幣または商品流通」で、具体的な内容が語られる。）
 - ・金と銀は、まず量的に分割でき、合体でき、かつ質がかわらないものであるという条件を満たすものだという事。
 - ・貨幣たる金や銀は、商品として、それが産出される地域での、労働の量によって価値を表現される。
 - ・根源に労働がある。
 - ・しかし、そのことは簡単に見えない。
 - ・だから、（商品は）金や銀が、どれくらいの重さかというだけで、その価値がどれほどのものであるかと思うようになる。

※ここに貨幣の魔術が生まれる。

『経済学綱要』川口武彦、平田喜久雄、田中慎一郎、福田豊、共著
法律文化社（1966.10.10 第1刷発行）1977.4.10 第14刷発行

※貨幣発生の必然性

- ◆商品は、その所有者にとっては使用価値ではなく、その非所有者にとって使用価値である。
 - ・商品は使用価値として実現されるためには、その持ち手を換えねばならない。
 - ・持ち手の交換が、商品の交換である。
 - ・商品交換とは、諸商品を相互に価値として関係させ、価値として実現することである。
 - ・商品は、使用価値として実現されるまえに、価値として実現されねばならない。
 - ・価値として実現されるということは、その商品に支出された労働が社会的労働と認められることである。

・その労働が社会的労働と認められるのは、その労働が他人にたいして有用な形態で支出される場合にかぎられる。

- ・商品は、価値として実現されるまえに、使用価値であることが実証されねばならない。
- ・それを立証するのは、ただ商品交換だけである。
- ・商品の使用価値としての実現と、価値としての実現は、相互に排除しあう関係にある。
- ・この矛盾は、使用価値と価値との統一物としての商品に内在する矛盾が、商品の運動過程——交換過程で現実化したものであり、商品の交換過程で解決されねばならない。

◆商品の運動過程——実現過程にあらわれるこの全面交換の矛盾は、商品所有者が本来的にもつ諸要求のあいだの衝突というかたちでもあらわれる。

- ・商品所有者は、彼の商品を使用価値として実現しようと欲する。
- ・彼の商品が他の商品所有者にとって使用価値をもつていようがいまいが、それを同価値の任意の商品と交換しようと欲する。
- ・他面では、彼は自分の商品を、ただ彼の欲望を充足させる使用価値をもつ他の商品とでなければ交換しようとしぬ。
- ・商品所有者のこのような行動は、彼の商品を一般的等価物にしようとするものである。
- ・すべての商品所有者がおなじことをしようとするから、結局、どの商品も一般的等価物となることができなくて、すべての商品が、価値として等置され、価値量として比較されることが不可能となる。
- ・ここでは、諸商品は、商品として相対するのではなく、ただ生産物または使用価値として相対するだけである。
- ・かくて商品の交換が不可能となり、商品生産も一般に成立しえなくなる。

◆商品交換がおこなわれて商品生産が一般化するためには、このような矛盾が解決されねばならない。

- ・なにによっていかにして解決されるか。
- ・ある一つの商品が、それ以外の全商品にたいして一般的等価形態を獲得して、全商品の価値を表現する一般的等価物になることによってである。
- ・ある一商品を一商品に一般的等価物にすることは、商品世界における全商品の共同事業、すなわちその社会的行為によってだけなされ、そして、一般的等価物たることがこの商品の社会的機能となった場合、この商品が貨幣となるのである。
- ・貨幣の出現によって、商品所有者は彼の商品をまず貨幣に転化する。
- ・この過程では、彼は商品を使用価値として譲渡するのである。
- ・これによって、その商品に支出された労働が社会的に有用労働であることが実証される。
- ・かくして、商品は、商品世界をつうじて一般的に価値として通用するもの、すなわち貨幣に転化されるのである。
- ・そのうえで商品所有者は、この貨幣を価値として通用させる。
- ・すなわち、彼の欲する任意の他の商品と交換するのである。
- ・貨幣の発生によって交換過程の矛盾が解決され、商品交換が可能となり、商品生産が一般化するのである。
- ・貨幣は交換過程の必然的産物であり、それは交換過程の矛盾の解決として発生したのである。
- ・いろいろの労働生産物が相互に等しいものとされ、事実上、商品に転化されてゆく交換過程の拡大と深化のなかで、商品にふくまれた使用価値と価値との内的対立は、商品と貨幣との外的対立へと展開されて、商品価値の独立形態——貨幣が完成されるのである。

◆ x 商品 A = y 商品 B という簡単な価値表現において、商品 A の価値を表現する商品 B は、その等価形態を、この関係から独立して社会的自然属性としてもつかのように見えるのである。

- ・一般的等価形態が、ある特別な商品の自然属性と合生して貨幣形態になると、この外観は、より完成される。
合生 (がっせい) 英語 **concrecence** くつつくこと。
- ・一商品は、他の諸商品が全面的に価値をその商品で表示するから、貨幣になるとはみえないで、逆に、一商品が貨幣であるから、他の全商品が一般的に価値をその商品で表示するようになる。
- ・媒介的な運動は、その結果をみると消失しており、なんらの痕跡をも残さないからである。
- ・この貨幣の物神性は、商品物神の神秘が目に見えるようになったのであり、より完成されたものである。